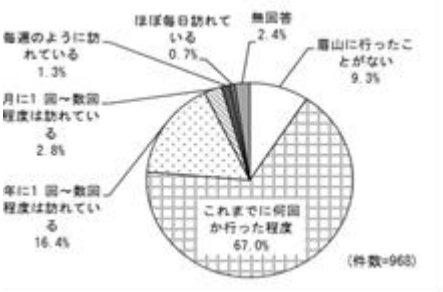
眉山における開発意図の変遷

徳島大学大学院　学生会員　○田中凌星　徳島大学大学院　正会員　尾野薫
徳島大学大学院　正会員　山中英生

1　はじめに

徳島市の中央に位置する眉山は現在市内有数の観光資源として扱われている山であり、その利用は江戸時代から始まっている。当時眉山は敵に占領された山頂から位置を俯瞰されてしまう恐れがあるとして軍事上重要な地点と考えられていた。そのため非常時に備えた兵の屯営基地として現在の寺町の位置に神社仏閣を移したが、眉山北東部に位置する大瀧山に移転された仏閣は外部からの客人をもてなす場として使われた。その後明治・大正にかけて大瀧山は公園として整備されていき、多くの市民に愛される場となる。

昭和に入ると県外客の誘致を目的とした開発計画が進められるようになり、開発の場は山頂へと移った。山頂公園やそこにつながるロープウェイ、ドライブウェイが建設され、眉山は徳島市のシンボル、観光地として広報されているが、それらの施設が有効利用されているとは言い難く、観光客の利用だけでなく徳島市民の利用状況も芳しくない。



観光事業として様々な開発が行われてきた結果、観光客の利用が少ないだけでなく市民の利用も少ないという現状に至った原因は何か。今後の利活用の方向性を示すためにこの原因を明らかにする必要がある。

そこで本研究では眉山における開発意図の変遷を明らかにする事を目的とする。そのために近年の開発計画が観光利用と市民利用のどちらを意識した計画だったのかを明らかにする。

2　既往研究と本研究の位置づけ

既往研究として徳島大学大学院先端技術科学教育部知的力学システム工学専攻建設創造システム工学コース所属の板東の修士論文「眉山に関わる人と利用の変化が空間形成に与えた影響について」が挙げられる。こちらの論文では眉山の開発に関する計画に着目し、各計画における計画主体、範囲、目指していた空間や目的を考察することで、眉山に関わる人や利用の変化と、それらが空間形成に与えた影響について明らかにしている。

本研究では文献調査で眉山にある施設などを把握したのちに板東が明らかにした開発計画を
⑴ 意図　⑵計画内容　⑶主体・客体の 3 点から分析し、どのような変遷をたどっているかを明らかにする。

3　眉山の歴史と認識

現在のように山頂にて開発が行われる前は「眉山公園」といえば中腹にある「大滝山」と呼ばれていた場所であった。眉山に関する文献を調査する過程で大滝山周辺が主に明治時代の徳島市内では著名な場所で、市民にとって親しみのある場所であったという知見を得ることができた。

また、眉山で計画された様々な開発に対し、疑問を感じる記述もいくらか見受けられた。これらを受けて実際に行われた開発計画を分析していく。

開発計画の分析にあたって、計画が行われた時期で大きく 2 つに分類する。明治末期に行われた「眉山公園保勝会による眉山公園開発計画」という計画で初めて観光客誘致を見据えた開発が計画された。この計画当時は眉山内の神社仏閣などからの反対によってあくまで「眉山の美化」に留まったが、以降の計画ではこの眉山公園保勝会を前身とした組織が発足されて観光事業が行われるなど、徳島市における観光開発の起こりとなった。そこで本研究ではこの計画以前を「前期」、以降を「後期」と分類して分析を進める。

第 4 章・第 5 章

開発計画を分析した結果次のようになった。左から順に、意図、計画内容、主体・客体となっており、黒枠は上述の「眉山公園保勝会による眉山公園開発計画」を示している。

意図の変遷では前期の間には「もてなす」、「来街者誘致」が多くみられる。その他、眉山の風致保存を重視していたことが分かる。後期に入ると意図が「観光客誘致」の 1 つに絞られ、観光事業が盛んになったと考えられる。

計画内容の変遷では前期には「公園」として整備されることが多かったと分かる。また「桜の植樹」、「保安林」が見られることから意図の前期に見られた風致保存の考えが計画内容に表れていることが分かる。後期に入ると自動車道、登山鉄道、ハイキングコース、ドライブウェイ、ロープウェイといった交通基盤が整備されるようになり、眉山内の交通の便をよくしようとしていたと考えられる。

最後に主体と客体の変遷。前期における主体は徳島市以外に「藍商人」「新町有志者」「眉山公園保勝会」といった市民団体が見られる。このころの開発計画の意図には「眉山の風致保存」が多くみられ、目的を同じとした徳島市と市民団体が両方存在していた。しかし後期に入ると阿波商工会議所などの組織や徳島市の主体が多くを占め、観光事業を進めていったことが分かる。そのことは客体にも見られ、前期は主に「来街者」だったのが後期に入ると「観光客」が見え始める。

第 6 章

本研究によって以下の事が分かった。

開発計画の意図は特定の人達をもてなそうという考えから、風致を保存して市民も含めた多くの人に訪れてもらう、そして外部から徳島市に人を誘致する場所にしようと変化していった。

計画内容は公園として整備、風致保存を行う事から眉山内における遊覧の便を良くして利用を促すものに変化していった。

開発計画の主体は「公園整備」、「風致保存」といった目的から市民団体と徳島市の両方が存在していたが、次第に徳島市が主体の多くを占めるようになった。

客体は全体的に「来街者」が多く見られたが、後期以降では「観光客」が現れ始めた。

これらの変化は阿波藍の衰退、昭和恐慌による徳島経済の衰退、交通基盤整備による観光客増加に応じた観光事業発展が大きな影響を与えていると考えられる。